

形式的告示と現象学的解体

——初期ハイデガーの思索にみられる二つの問題とその克服——

岡 本 敦 之

序

本稿は初期ハイデガーの思索を探究するものである。しかし初期ハイデガーの思索を探究するとはそもそも何を意味するのであろうか。『存在と時間』刊行以前（一九二七年以前）の思索を「初期ハイデガー」として研究を行っている学者は国内外を問わず数多く存在しており、また現在のハイデガー研究の中心の一つに数えられよう。そしてこうした研究において例えば、初期の彼の思索に「アリストテレスとの不断の対決」⁽¹⁾を見て取る研究者もあれば、「論理的な研究」⁽²⁾を、あるいは「宗教に関する論述」⁽³⁾を重要視する見解を述べる研究者もいたりする。しかしなぜこれほどまでに一人の哲学者の、しかも初期の思索が研究者の関心を惹くことになっているのであろうか。

この問いに対していくつかの解答が用意できよう。それは第一に『存在と時間』がいかにして成立してきたのか、その成立過程を追うことによって本書（『存在と時間』）へのさらなる接近を試み、また『存在と時間』未完の理由を

解き明かそうとするため、第二にハイデガーの思索全体の源泉を探ること、彼の難解な思索の道行きを新たに捉え直そうとするため、第三に初期ハイデガーに見られる特有の思索、すなわち彼がその後何らかの理由で扱わなくなった、あるいは問題を提起するに留まっている思索に注目し、これらの問題を再検討して展開させるため、である。まず第一の解答に関しては『存在と時間』をめぐってのことであり、こうした研究は初期ハイデガーの講義録が全集として公になる以前から、限られた資料をもとにして行われていた。それは『存在と時間』という書物がその後の世界に与えた影響及びその極めて難解な、そして奇妙な語り口を考慮すれば当然浮上してくるものであり、ましてや主著が未完に終わったとなるとなおさらその書物の成立過程を探ろうとするのは正鵠を得ているといえよう。また第二の解答に関してもこうした理由の延長線上にあるものと思われ、例えば彼の思索に「転回 (Kehre)」が生じた原因などを初期の思索に求めたりする研究者も現われている⁽⁶⁾。

一方第三の解答は初期ハイデガーの講義録が全集として出版されたことに端を発している。つまりそれまで『存在と時間』以前の思索というのはほとんど断片的にしか知りえなかった。しかし一九七五年から開始された全集の刊行により、ある程度まとまったかたちで彼の思索を目にすることができるようになったことで『存在と時間』という視点以外に、新たなバースペクティヴを獲得できたのである。この第三の解答は今後の初期ハイデガー研究の意義においてますます重要となってくる。その理由は——これは同時に先程の問いへの理由でもあり、そしてそれに対する第一、第二の理由にも関わることなのだが——初期ハイデガーの講義を聴講した者の中から多くの偉大な哲学者が輩出されたという事実が示してくれている。つまり初期ハイデガーの講義には単にその後の彼自身の思索を探るために役立つような思索があるだけでなく、聴講者自身を哲学的に思考させようとする思索もあるのである。それはある時は問題提起であったり、またある時は問い方や考察の仕方であったりする。O・ベッカーやH・G・ガダマー、K・

レーヴィットといった当時の聴講生たちは、こうした初期ハイデガーの思索に触れることで哲学的な思考法を会得し、そこから自分たち独自の哲学を形成していったのである。従って初期ハイデガーの思索には、我々聴講者（読者）を全く新しい哲学的な問いや独創的な手法の前へと導く力を持っており、こうした問いや方法が講義全体に存しているわけである。

しかし初期ハイデガーの講義録から「新しい問い」や「独創的手法」がそう簡単に見つけられるわけではない。なぜならそれらは散在しているからであり、また初期ハイデガーにおける思索全体が「一つのまとまりを持ったもの」として提示されていないからである。従って我々に課せられた研究課題は、まず初期ハイデガーの思索を整理し、何が問題にされ、その中で何が研究されることなく課題として残されたのかを提示することが先決であり、次にそれらの残された課題は研究可能なかどうか、はたまた研究に値する課題なのかどうかを見極め、最終的にそれが重要な課題であると判断されたならばその課題を「自身の研究の主題」として引き継ぐということが行われなければならない。そしてこうした研究が遂行されたならば、おのずと『存在と時間』の成立過程や未完の理由に関しても新たな見通しが開けてくるであろうし、またハイデガーの思索全体を源泉から捉え直す試みもより有益なものになるはずである。

本稿では以上のような初期ハイデガーの思索の探究意義に基づきつつ、まずは当面の課題として初期ハイデガーの思索の整理を目指すことにし、中でも「初期フライブルク時代（一九一九―一九三三年）」を取り上げることにする。整理の仕方としてはこの時期彼が抱えていた問題（困難さ）を提示することから着手することにし（第一章）、その問題がいかにして克服されていたのか、その解決方法が次に示される（第二章）。そしてこれらの分析をもとに若干の問題点を指摘し考察することにした（第三章）。

第一章 初期ハイデガーの抱えていた問題 —— 「前提」と「先把握」 ——

初期フライブルク時代の講義は、一方ではハイデガーの哲学に対する熱意、あるいは意気込みが伝わってくるたいへん魅力的なものとなっているのだが、他方では彼の関心があらゆる方向へと向けられているために統一性を欠き、きわめて読みづらく分かりにくいといった印象を受けてしまう。また思索の行詰まりも多く見られ、決して一貫した思索（一本のまっすぐな道）とは言いがたい。このことはハイデガー自身も認めているところであり、彼は晩年になって当時の自分の思索の「道」を振り返り、「多くの停留と回り道と脇道とを必要」(S. 287)とするものであったと語っている。⁽⁷⁾確かにそれぞれの講義内容を見ればバラバラという感があり、また術語の規定も明確にはなされていない点も分かりづらい原因の一つとなっている。

ならば初期フライブルク時代の思索を知るにはどうすればよいのか。そこでこれらの講義を繋いでいるものの一つとして、彼が苦悩した問題、「困難」(Schwierigkeit)に着目することにする。「困難」は初期フライブルク時代、そして少なくとも『存在と時間』刊行の頃までは若干の変化が見られるとはいえ、一貫して持ち続けていた。ハイデガーが抱えていた「困難」には大きく分けて二つある。一つは「前提」(Voraussetzung)に関する問題、そしてもう一つは「先把握」(Vorgriff)に関する問題である。これらは一見すると同じ一つの問題であるかのように思われるがそうではない。むしろ全く関係がないというわけではないが、しかしハイデガーは明らかに区別して考察している。ではそれぞれどういったことが具体的に問題となり、そして「困難」なものとして示され区別されているのであろうか。

「前提」をめぐる問題に関しては一九一九年の戦時緊急学期講義「哲学の理念と世界観問題」(GA.56/57)を取り

上げるのがよいであろう。ここで問題となっているのは、「根本学としての哲学の理念はいかにして獲得されうるのか」(GA.56/57, 15)である。哲学とは「根本学 (Urwissenschaft)」である。従って哲学の理念は本質上哲学自身から概念化されなければならない。しかし哲学が何であるかを哲学を遂行することによって導き出すことは不可能である。つまりここに「根本学」が抱える「循環」の構造が露呈してくることとなる。では、この「循環」はいかにして解消されるのか。ハイデガーはこの「循環」の問題をあらゆる哲学の理念の「前提」となっているものを取り除くにはどうすればよいかと捉え直し、「前提」に関して論じていこうとする。ここでは様々な「前提」を排除する試みが提示されるのだが、いずれの場合も解決には至らない。⁽⁸⁾

そこで彼は、そもそも「循環」や「前提」ということがなぜ問題となるのかと問い、それは「理論的」な領域でのみ問題を扱っているからであると考ええる。

循環的あり方は理論的難点であり、理論的に作り出された難点なのである。(GA.56/57, 95)

よって「循環」を解消するためには理論的ではない領域にまで視野を拡大して考察しなければならない。つまり「前提」や「循環」などが成立しない「理論-以前の学 (eine vor-theoretische Wissenschaft)」あるいは「非理論的な学 (eine nicht-theoretische Wissenschaft)」から「根本学としての哲学」を規定しようと試みるのである。では「理論以前の学」が扱うものは何であるのか。それは我々が日々経験している「体験 (Erebnis)」である。しかしこの「体験」とは「心理学」が扱うような「対象化 (理論化)」された体験などではなく、まさに「生き生きと (lebendig)」体験された、非理論的な「体験そのもの」なのである。そしてこうした「生き生きとした生の体験」を扱う「理論以

前の学」をハイデガーはこの時期「現象学」と呼ぶのである。

このように第一の問題、「前提」に関する問題はこれから哲学という学問を行う上で哲学の理念をどう規定すればよいのかという問いを出発点にしている。そして「理論以前の学」としての「現象学」による「生き生きとした生の体験」分析を基盤に据えることで、「前提」の問題の解消が企てられたのである。しかし「生き生きとした生」をいかにして生き生きとしたまま記述するのかという課題が新たに出てくることとなり、これがハイデガーの当時の講義課題、「困難さ」ということになる。

第二の問題、「先把握」の問題についてはどうであろうか。「先把握」が主題として扱われているのは、一九一九年から二二年にかけて書かれた書評、「ヤスパース『世界観の心理学』に寄せる論評」(GA9、以下「論評」と略す)及び一九二〇年夏学期の講義「直観と表現の現象学——哲学的概念形成の理論——」(GA59)においてである。両者の関係は全集五九巻の編集者が「あとがき」で指摘しているように内容的な関連性が見られるのであるが、それに加えて構成もきわめて酷似している。というのも両者とも当時の著名な哲学者であるヤスパースやナトルプ、ディルタイの哲学を批判するという体裁が採られているのである。ではなぜこうした体裁がとられたのか。このことと内容とは実は無関係ではない。つまりハイデガーは西洋の伝統的な哲学を知らず知らずのうちに「無批判的」にそのまま受け入れてしまっている彼らの哲学を批判することで、「先把握」という問題を浮かび上がらせようとしたからである。

例えばヤスパースに対してハイデガーは「論評」の中で「世界観の心理学という問題提起をもって、心的なものに対する一定の捕捉が与えられているのであり、その心的なものはそれ自身の側において、この問題設定の以前においては、際立たせられないままで、伝統的に伝えられた一定の先把握の内で見られている」(GA9、c)と述べ、そこでは「心的・精神的現存在のこの全体の存在の意味に関する先把握が含まれており、さらにはいかにして生が透明化さ

れて生きられるべきであるかというその可能的ないかにしてということに關する先把握が、つまり生が生としてそれ自身から総じて「諸々の可能性」というようなものを際立たせているという生の根本意味に關する先把握が含まれてゐる」(GA.9, 8)とするのである。またナトルプに対しても、彼の扱う「自我問題」はすでに「構成理念 (Die Idee der Konstitution)」によつて規定されており、「構成という先把握でもつてあらゆるもの——客觀的なものと主觀的なもの——があらかじめ關係連関 (Beziehungszusammenhang) を、あるいは最も広い意味において事象性や物体性 (Dinglichkeit) を負わされることが運命づけられてゐる」(GA.59, 142)と批判する。一方デイルタイへも、彼の「先把握」は「心理学的思索は生の経験から生じる」(GA.59, 163)としてゐるところに存するとし、またデイルタイにも「構成」契機の流入が見られるとして「重要な具体的形態を頼りに心的現實性を了解するという努力は、彼の心理学を規定して」(GA.59, 166) おり、「ここから了解の概念が規定され」(ibid.) しまつてゐると指摘している。

こうした他の哲學者へと向けられた批判的な「先把握」という語の使用は、その後より一般的な意味で用いられることになる。一九二二年の秋に書かれたとされている「アリストテレスの現象学的解釈——解釈学的状況の提示——」(GA.62, 以下「ナトルプ報告」と記す)では、「先把握」は単にある事物に關してあらかじめ与えられている一定の理解と解されており、一九二三年夏学期講義「存在論 (事實性の解釈学)」(GA.63)においても、先把握 (先持) は、「先だつて担うもの」(GA.63, 16)、あるいは「接近や交渉のうちで予め把持されているもの」(GA.63, 80)と規定されている。つまり我々が事物を理解しようとする場合に「あらかじめすでに知つてしまつてゐること」という意味で用いられることとなるわけである。しかし依然として批判的な意味合いを含ませてはいる。

さてこうして見てくると、両者の違いというのは「前提」とはあくまで「理論的前提」のことであり、そこには「理論的なもの (論理学的なもの)」と心理的なもの (心理学的なもの)」との關係が問題となつてゐるのに対し、「先把握

握」においては我々（哲学者も含めた）が所有している物事理解の構造（捉え方）にかかわっており、「時間的前提」、「歴史的前提」とでも言いうるような、または知らず知らずのうちに入り込んできているという意味で「先入観」あるいは「先入見」といったものを意味していることが分かる。それゆえ「前提」とは取り除くことが可能であり、またそうされなければならないものであるのに対し、「先把握」は理解の構造上取り除くことは不可能であり、無反省的に受け入れられた「先把握」は形成し直されねばならないものとして扱われることになる。ではこうした二つの問題はその後いかなる変遷を辿ることになるのであろうか。あるいはこれらの問題はそれぞれどういった方策で解決をみることとなるのであろうか。そして両者の関係はどう結びつけられるのであろうか。

第二章 形式的告示と現象学的解体

前述した二つの問題、「前提」と「先把握」の問題は二つの異なる方法によって論じられることになる。「前提」に関しては「形式的告示 (die formale Anzeige)」という手法が、そして「先把握」に関しては「現象学的解体 (die phänomenologische Destruktion)」という手法がそれぞれ用いられる。

1. 形式的告示

「形式的告示」とは、ある対象に対してその対象が「何 (Wie)」であるかを規定してしまわずに、その対象が「いかに (Wie)」あるのか、その状態を記述する方法である。

「前提」の回避を目的とし、非理論的な体験の記述を目指す課題は、生を「生き生きとした生」のまま捉えるというものであった。一九一九/二〇年に行われた講義「現象学の根本問題」(GA58) はまさにこうしたことが主題とな

る。いかにして「生き生きとした生」、「流れる生」を学的に表現することができるのか。もし心理学的に生を描写してしまえば、それは生の動きを止めてしまうことになり（ハイデガーはこのことを「隔生 (Ent-leben)」と呼ぶ）、「前提」回避の目的は達成されない。生の客観化はどうしても防がねばならない。そこで考えられたのが生を「何」として記述するのではなく、生の「状態」を記述する方法なのである。実際ここでハイデガーは「形式的告示」という手法を用いるとは述べていないが、この講義の最終部で彼は「生を生として生き生きと把握する場合のその仕方」に関する研究を「(客観化の) 批判的解体」⁽¹²⁾ (GA 58, 248) の研究と呼び、この研究において「これらの概念〔生、体験、自我、自己〕は、一義的にしっかりと固定されているのではなく、(…)これらの概念はそれゆえ単に形式的性格(形式的告示の意)を所有しているだけなのである」(GA 58, 248-249)と述べている。そしてさらに「形式的なもの」とは「事物について何も先決していない」ということであり、また「形式概念はただ告げ知らせるだけであり、まだ何も表現概念の機能を持っていない」(GA 58, 249)とも言っている。すなわち「非理論的体験」の記述は「形式的告示」によって遂行されるわけである。ここでの「形式的告示」の役割は、もちろん「生き生きとした生」、「生動性」の記述にあるのだが、このことを遂行することはまた同時に客観化(理論化)へと向かうことを予防するという働きでもある。

一九二〇/二一年に行われた講義「宗教的生の現象学」(GA 60)では「形式的告示」ははっきりと主題となり、規定される。ここでも「形式的告示」は「事象的生の客観的なものへ落ちてゆくことへの予防処置」とされている。まず、「形式的告示」とは「何か関連的なもの」(GA 60, 63)であって、「告示」とは現象の「関連」を告示することである。従って現象(事象的生)の内容は規定されずにただ現象の「つながり(関連性)」のみが示されることとなる。そして「形式的告示」のうちに備わる「客観化の予防処置」に関して、「この予防処置の必然性は事象的生の傾向で

ある落ちてゆく傾向から生じるのであり、この傾向はいつも客観的なもののうちへ滑り落ちることが差し迫っており、この傾向から我々は現象を取り出さなければならない」(GA.60, 64)とハイデガーは言っている。従って「形式的告示」とは常に「事實的な生」が「客観化」へと滑落する恐怖と戦いつつ「生き生きとした生」を記述する努力を続ける作業なのである。

さて「形式的告示」はこのように「非理論的体験」あるいは「生き生きとした生」の記述において用いられる場合とは別に「基準の設定」や「定義づけ」を行う場合にも採用される。例えば一九二〇年に行われた講義(GA.59)では次のような仕方です。「形式的告示」が用いられている。この講義の前半部では「歴史」が問題となる。「歴史」を様々な意味に分類し、それぞれ個々に論じた後、ハイデガーは歴史の意味連関を正しく捉えることの遂行をもくろむ。しかし個々に取り出された具体的な歴史の意味を正確に統合するためには、そのための基準(ものさし)になるものが必要となってくる。そもそもいかにして意味連関を正しく捉えることを遂行すればよいのか。こうした「遂行の性格づけ」を行うために「形式的告示」は用いられるのである。ではなぜ基準をわざわざ「形式的告示」によって示す必要があるのか。それは以前に見たあの「循環」へと陥らないためである。

もう少し別の例で見てみることにしよう。ハイデガーは当初「哲学は抽象的な定義づけを行うことはできない」(GA.59, 36)と主張していた。これは厳密には非理論的な生の記述を基盤としなければ哲学は定義づけられないという意味である。「生き生きとした生」を記述するということが問題となつたのも、その発端は「哲学の理念」を規定するということがあったからであった。しかし一九二一／二二年に行われた講義「アリストテレスの現象学的解釈」(GA.61)ではどういうわけか「生の生動性」の分析に先立って哲学の定義づけがなされている。ハイデガーはまず哲学を、プラトンが用いた用例を提示しながら「…へと態度をとる (Verhalten zu...)」その仕方」であると捉える。⁽¹³⁾で

は何へと向けて態度をとるのか。それはおのれ自身がそうである「存在者」へと向けてである。ではおのれ自身そのものであるところの「存在者」に対して原理として働いているものは何であるのか。何が重要となりうるのか。それをハイデガーは「存在」、あるいは明確には「存在の意味」であるとしている。そして最終的にこう結論づけるのである。

原理的に形式的に告示された哲学の定義として判明したことは、哲学とは存在（存在意味）としての存在者へと原理的に認識しつつ態度をとるということであり、従って決定的に重要であることは、態度をとるということにおいて、そして態度をとるということに対して、態度をとるということを持つことのそのつどの存在（存在意味）なのである。
(GA.61, 60)

こうして得られた「哲学の定義」はただ形式的に告示されただけであるため、まだ何も語られてはいない。

哲学の形式的に告示された定義の意味のうちに存するものは、態度をとることの事実的な状況に根本意味が本来的に与えられれば与えられるほどますます根源的に、そして正確に哲学の形式的に告示された意味の解明は遂行されるということである。(GA.61, 63)

つまり正確に言えば「哲学の定義」が形成されたわけではない。この「定義」が定義として確立されるためには具体的な「今ここに生きている」という「事実的生」の意味が獲得されなければならない。あくまで「哲学の定義」は「事実的生」の意味の獲得の上に成り立つものであって、ここで示されている「哲学の定義」とは哲学と呼ばれるで

あろう領域（哲学の可能性）をただ漠然と指し示しているに過ぎない。ところがこうした指し示しが実は重要なのである、これによりそれまで何の手がかりもなかった「事象的生」の意味の獲得が遂行可能となるのである。「哲学の定義」が「事象的生の分析」に先立っているのは、「形式的告示」の「非先決性」とでも言いうるような性格によって哲学の漠然とした方向性を指し示すためなのである。

2. 現象学的解体

「形式的告示」が差し当たっては「理論的前提」の回避、もしくは「生き生きとした生」の記述を目指して考案されたのに対し、「現象学的解体」はこれまで哲学と呼ばれてきたものの放棄及び我々の中に備わっている、伝統を背負わされた「遂行歴史的（vollungsgeschichtlich）な生」の捉え直しを目指している。「解体とは軽蔑的不快感を所有するものではない」（GA 59, 171）とされ、つまりは既成の哲学をそのまま受け入れてしまっていることへの積極的な批判なのであって、我々が生についてすでに了解していることに対する再構築をもくろむものである。しかし当面の目標は、そもそも我々は一定の「先把握」の中を動いているということに気づかせること、そしてその「先把握」がいかなるものであるのかを示すことにあり、このことを「現象学的解体」と呼んでいるわけである。彼は他に「現象学的批判的解体」、もしくは「現象学的無前提性」⁽¹⁴⁾、「現象学的批判」、あるいはただ単に「解体」と呼んだりもするのだが、これらが意味するところは今述べたこととはほぼ同じとみなしてよい。例えば先程も触れたヤスパースへの「論評」の中でも、「現象学的解体」ではなく「現象学的批判」あるいは「現象学的無前提性」といった言葉が用いられている。しかしここで述べられている「無前提性」とは科学的に、あるいは理論的に前提をすべて除去することではなく、何の反省もないまま、全く気づくことなく受け入れられているもの、すなわち「先把握」を際立たせ、この

「先把握」が「先把握」としてふさわしいものと呼べるのかどうかを吟味しようとする哲学的方法を意味している。

そしてこの方法によって「現象学的批判」が遂行されるのであるが、この批判は「問題設定と概念的解明との経験の土台を成しているもの、そしてしかも直観になつた経験の土台（現象学的意味において理解された経験であるが）を成しているものを追究する」（GA.9, 6）ことであり、すなわち「先把握」を追究することである。従つて「現象学的批判」とは「研究の対象をさらけ出させつつ、しかしその研究対象をその内在的な予描「先把握」へと追いつつ、その予描そのものを正しく知らされた固有の意味に従つて再び検査する」（ibid.）ことなのである。つまり「現象学的解体」とは単なる「批判的粉碎（*kritisches Zerschlagen*）」でも「破壊（*Zertümmern*）」でもなく、むしろ「指向された解体（*gerichteter Abbau*）」である。⁽¹⁵⁾ そしてこうした「ラディカルな解体と由来に遡つての組み立てとが必要とされており、しかも我々自身がそうであるところの歴史との対決、そして哲学することそのものの意味において共に遂行された本来的な対決が必要」（GA.9, 5）なのである。よつて「前もつて描かれた歴史的・事実に先与されたい問題状況が、現象学的・批判的解体のための始まり」（GA.59, 39）となるのである。

3. 二つの現象学的方法と解釈学

これまで「形式的告示」と「現象学的解体」は別々の問題意識から形成され、そして別々の課題を扱っていることが示された。しかし、両者が全く別々に独立して議論がされ続けたかといえそうではない。確かに初期フライブルク時代の始めの頃は分裂傾向が強いといえよう。しかし一九二二／二三年の講義（GA.61）以降では両者が一つの課題をめぐる議論が展開されることになる（このことに関しては次章で問題にする）。そして「ナトルプ報告」及び一九二三年の講義（GA.63）において、すなわち学問的には「解釈学（現象学的解釈学）」と呼ばれる研究領野において両者

が同じ土俵の上に立つこととなる。では以下で「解釈学」という名の下に二つの方法がいかなる役割をそれぞれ果たすことになったのかを見ていくことにしよう。

「解釈学」が最初に議論されるのは一九二二年秋に提出された「ナトルプ報告」においてである。ここでハイデガーはまず「今日の状況の哲学の大部分は非本来的にギリシャ的な概念構成の中に留まっている」(GA62, 367)とし、この概念構成は現代に至るまでに様々な解釈のされ方をしてきたと述べている。従ってギリシャでは何らかの経験に基づいて形成された概念も今ではその経験が忘れ去られ、概念だけが今日使われているのである。しかしその概念が由来している元の意味性格が完全に失われたわけではない。「人間の理念や生き方の理想、人間の生という存在の見方に関して、今日の状況の哲学は、人間や人間的な現存在についてのギリシャ的な倫理、とりわけキリスト教的な理念が時熟させた根本経験の末端の中に留まっている」(GA63, 368)のである。従って「事実性の現象学的解釈学」は「従来伝えられてきて今では世間で支配的となっている被解釈性を、その隠された動機、不明確な傾向、解釈方法に関して解きほぐし、解体的な遡行を行ないつつ、解明の根源的な動機源泉にまで突き進むことが求められている」(ibid.)とし、「解釈学は、解体という方途によってのみその課題を成し遂げる」(ibid.)とされるのである。ただし「現象学的解体」という課題において重要なことは「西洋人間学の歴史を根源的に遡り、その歴史の決定的な転機の一つにおいて、存在論上、論理学上の中心的な構造を浮き彫りにすることである。」(GA63, 371)すなわちアリストテレス哲学に関しての具体的な解釈を行うことが必要なのである。

こうした「解釈学」の研究は一九二三年の講義(GA63)へと引き継がれてゆく。ここでハイデガーは「解釈学」を「事実性を出会いや見地や把握や概念にまでもたらすように解釈することの遂行のある一定の統一態」(GA63, 14)と規定する。従って「解釈学」によって自分自身が何であり、今いかなる状態で存在しているのかということ

理解する可能性が形成されるわけである。このことをハイデガーは「現存在」が自己自身に対して「覚醒してあること (Wachsein)」だとする。よって「解釈学」が主題とするのは現存在の覚醒の形成を目指すことなのである。では「現存在」はおのれをどのような仕方で理解しようとしているのであろうか。「現存在」の覚醒の仕方には二つの方向、「歴史的意識」と「哲学」とがある。「歴史的意識」においては「現存在」自身が一定の仕方ですであつたという存在様式のうちで見ているのに対し、「哲学」においては一定の仕方で自分自身が常にしかじかにあるという存在様式のうちで見ている。こうしたおのれを知る知り方、覚醒の仕方によってすでに理解していることをハイデガーは「被解釈性 (Ausgelegtsein)」と呼び、「被解釈性における現存在の存在論的構造」を提示することが「解釈学」の課題であるとするのである。しかし「解釈学」にはさらなる課題が与えられる。ここでは「解釈学」は「現象学」の歩む道と同じ道を進むことが要求される。「現象学」の遂行は対象がおのれ自身を与えてくれるがままに規定しようという試みである。よってこれまでの哲学的な問いの伝統、すなわち事象の隠蔽の伝統は事象源泉に至るまで遡求されなければならない。「伝統は解体されなければならない」(GA 63, 75)のである。さて、「解体ということがここで意味しているのは、ある一定の根源的なものがいかにして下落し隠蔽されるに至ったかを見るために、また我々がこの下落の状態にあることを見るために、ギリシャ哲学へ、アリストテレスへと還帰するということ」(GA 63, 76)である。そしてこの解体が「解釈学」のさらなる課題なのである。

しかし「解体」は即座に着手されるわけではなく、まずは「今日の状況をはつきりと描き出すこと」(GA 63, 75)から始めなければならない。つまりは先程の「被解釈性における現存在の存在論的構造」の提示から着手されるのである。ハイデガーは「被解釈性」という術語をさらに「先持 (Vorhabe)」とし、「見られているものをしかじかにあるものとして予めすでに把持しているその把持されているもの」(GA 63, 80)と規定する。そしてこの「先持」にお

いて「現存在」が了解しているおのれのあり方をテーゼの形で示すわけであるが、その示し方というのが「形式的告示」なのである。ここでは「現存在」の持つている「先持」は「現存在は世界の内にある」という「形式的告示」によって捉えられることとなる。しかしこの「先持」は、決して固定された命題のようなものではなく、まだ何も語ってはいない。ただ「未規定ではあるがなんらかの仕方で理解されうる表示内容から出発して理解を正しい視線動向にもたらしこと」(ibid.)を要求しているにすぎない。従って一見正しいように思える見方、例えばこの場合なら「コップの中に水があるのと同様に世界の中に人間もいる」とする見方を拒否することが必要であり、こうした予防を促すことも「形式的告示」を正しく捉える仕方なのである。とはいえ「形式的告示」は所詮、「空虚な可能性」を示しているにすぎない。従って具体的に分析を進めていく、つまり「先持」の仕上げを行わなくてはならない。ハイデガーによれば「先持の仕上げにとつては、現存在をその日常性において見ることが決定的に重要になる」(GA68, 88)のだという。そして「平均的日常性におけるそのつどの現存在への眼差し傾向の内で、『事象的な生(現存在)は世界の内にあることを意味する』という先持の形式的告示が直観的に証示されうるようになる」(ibid.)のである。

以上により「前提」の問題に対して「形式的告示」が、「先把握」の問題に対して「現象学的解体」がそれぞれ解決法として案出され、さらには両者が交差するところに「解釈学」という学問の構想が練られたということが判然となったわけであるが、次章ではこれらの分析を踏まえていくつかの問題点を提示することにした。

第三章 「哲学的前提」と言葉をめぐる問題

最初に初期フラインブルク時代のハイデガーの思索の歩みを再度簡単に振り返っておきたい。ハイデガーの抱えていた問題は大きく分けて二つあり、それは「前提」と「先把握」に関するものであった。そして「前提」を取り除くた

めに考案されたのが「形式的告示」であり、「先把握」の再形成のために用いられたのが「現象学的解体」であった。しかしある時期から「形式的告示」は当初の使用法である「生き生きとした生」の記述という目標から、「哲学の定義」へと変化をみせる。一方、「現象学的解体」は「先把握」の源泉にまで遡ることが要求され、「解体」とは「ギリシャ哲学、アリストテレス哲学へと遡ること」だと規定される。その後「形式的告示」も「定義」に続いて「先把握（先持）」の仕上げに活用され、この両者は「解釈学」という学のもとで一つの枠組みの中へと収められることになった。

さてこうして見てくると、いくつかの問題点が指摘されよう。以下にそれらを示し、個々に検討してみることにする。

1. なぜ問題が「前提」と「先把握」に分裂していたのか
2. なぜハイデガーは「形式的告示」に固執したのか

1. なぜ問題が「前提」と「先把握」に分裂していたのか

「前提」の問題には、フッサールの『論理学研究』が大きく関係している。というのも彼は「現象学へ入っていった私の道」⁽¹⁶⁾の中で、『論理学研究』において自分を悩ませた「一つの主要な困難さ」として、「現象学と自称する思索の行き方は一体いかにして追遂行されるべきであるのか」(ND 83)を挙げている。そしてその原因を彼は『論理学研究』の第一巻と第二巻の間に見られる「分裂性」にあるとし、つまり徹底した「心理学主義批判」と「純粹論理学」の必要性を説いた第一巻と、「現象学的記述」でもって言わば「心理学主義」へと逆戻りした感のある第二巻とのつながりがどうしても理解することができないからだと考えた。従って「現象学的記述」とは何か、「現象学が論理学

でも心理学でもないとするれば、現象学の独自性はどこに存するのか」(ND.83)が問題となったのである。

その後、一九一六年に出版された教授資格論文「ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論」(GA.1)の「結び」の中で、ハイデガーは『主観的側面』を顧慮しない単なる、『客観的な』一般対象論は不完全なものに留まらざるをえなく」(GA.1, 404)と、「主観的論理学」の重要性を示す。そして「主観的側面」と「客観的側面」とを繋いでいるのが「生き生きとした精神」(Der lebendige Geist)であり、この「生き生きとした精神の形而上学的根本構造」を示すことが両者の結びつきを解くカギになると考え、これが今後の課題として提示される。この「生き生きとした精神」の把握という課題はそのまま「生き生きとした生の体験」を捉えようとする課題となつてゆく。従つて「前提」の問題はこうした流れを汲むものであり、そこには「論理学」、「心理学」、「現象学」をめぐる考察が根底にあるのである。

一方「先把握」の問題に関してはハイデガーの「歴史」への関心が大きく作用している。例えば「論評」では、「先把握」が主要なテーマとなつているが、それと同時に「歴史」も問題となつている。ただしここで言われている「歴史」とは「ある客観歴史的な現象」の意で用いられているのではなく、「今ここで生きている私のうちに備わっている自己自身への関わり方」を意味している⁽¹⁷⁾。従つて「事實的生」は「遂行歴史的な生」と呼ばれ、この「遂行歴史的な生」へといかにして接近するか、その方法が問題となるのであり、そこに「現象学」が関わってくるとハイデガーは考えていたのである。

こうした「歴史」に関する考察はその後一九二〇年に行われた講義(GA.59)では、あつまごとされている「歴史」の意味を詳細に分析してみたり、また一九二〇／二一年に行われた講義(GA.60)でも「歴史的なもの」と「事實的生」との関係が取りざたされたりするなど度々論じられることとなる⁽¹⁸⁾。しかしこうした「先把握」の考察と「前

提」の考察とは一つの問題として捉えられていくことになる。ではいかにして「前提」と「先把握」は一つの問題体系をなすことになったのか。それはハイデッガー全集第六一卷に収められている「付論Ⅰ」を見るのがよいであろう。⁽¹⁹⁾

「付論Ⅰ」の主題は「前提」である。しかしこの「前提」とはこれまで問題にしていた「理論的前提」のことではなく、彼は新たに「理論的前提」も含めた「前提」そのものを規定し直すことを試みようとするのである。彼はまず「前提」の意味を「前 (Voraus)」と「置 (Setzen)」に分解し、さらにこれらの意味を三つに区分する。第一の意味は「論理学的」な「前」と「置」であり、この場合の「前」は「ある理論的な根拠づけの連関内にその基礎をもつ根拠」(GA 61, 158)を意味する。そして「置」とは「理論的設置 (theoretisches Ansetzen)」であり、「ある根拠の条件下で定式化可能である」(ibid.)ことを意味している。第二の意味は「時間的」な「前」と「置」であって、「前」は「…よりも前に (zuvor)」や「最初に (zuerst)」、そしてこれらに加えて「あらかじめ (vorweg)」を意味しており、「置」は「非理論的把握や態度表明等々の意味で多義的である」(ibid.)とされている。

そしてこれらを踏まえて第三の意味である「哲学的前提」が規定されることとなる。まず「哲学的前提」とは「論理学的前提」とは全く異なることが述べられる。一方「時間的前提」はそれ自身としては「無規定的であるが、しかし時間的のうちにある様々な規定可能性が形式的告示の道程において哲学的前提の意味の解明を行う場合の手がかりを与えてくれる」(GA 61, 158-159)のだという。従って「哲学的前提」の獲得は「時間的前提」を手がかりに開始されることとなるのだが、ここでハイデッガーは「具体的な議論」に入る前に「先把握」と「前提」との連関について提示している。それによれば「先把握とはその起源を前提のうちに持つのである」(GA 61, 159)が、しかし「置かれていること (Gesetztheit)」、あるいは置くこと (Setzung) といった表現はふさわしいものではなく、置くということでは全くなく、むしろ歴史的・史学的に先行して一現に存在していること (ein geschichtlich-historisches Voraus-dasein)]

(ibid.)だと捉える。そしてその後「前提」は「事実性の現に存在している歴史的なものに含まれる」(GA.61, 160)ことが述べられ、ここから考察は「解釈」へと向かうことになり、そして「哲学的な問題定立の方向」として「我々が問うのは、いかなる対象性が哲学の中で、どのように、そして何のために先把握にさせられるのか、そしてこうした先把握の生動性のうちで把握され保持されるのかということである」(GA.61, 171)とされるに至る。

最終的に「付論I」では「先把握はいかにしてあるのか、いかにして人は実存的に先把握を規定するのか」(GA. 61, 179-180)と問われ、「先把握は対象が何であり、いかにしてあり、所有されているのかを対象が要求するところのものから受け取られるのであり、すなわち事実性のうちで、そして事実性へ向けて気にかけることから受け取られる」(ibid.)とされる。従ってここにハイデガーの「関心」が「前提」から「先把握」へと移行したことが読み取れるよう。あるいは「先把握」へと吸収されたと言えるかもしれない。そしてこうした関心の移りゆきがすでに次の思索の展開を暗示している。それが「解釈学」である。

「前提」と「先把握」の分裂が起こった原因は、ハイデガーが「vor-」の意味(「先」の意味)を区別して考察していたためである。「…よりも前にある」、「…よりも先にある」という場合、例えばハイデガーは一九二四年に行ったマールブルクでの講演「時間の概念」(GA.64)の中で「数列において4の前に3がある」(GA.64, 122)という例を出し、この場合、「前」には時間的要素は全く含まれていないことが述べられている。「論理学的(理論的)前提」は「非時間的前提」あるいは「非歴史的前提」であり、時間(歴史)とは無縁の、全く独立した「前提」なのである。しかしその一方で我々の理解の仕方(構造)には、時間的要素が含まれている。「すでに知っていること」、「前もって了解していること」のうちには、「過去」の意味が存している。さらに言うなら「先把握」には「伝統」や「歴史」が流入してきているのである。従って「先把握」は——あるいは「論理学的前提」に対応させて「哲学的前提」

は——「時間的前提」と近い関係にあるのであり、「歴史的要素」を含んでいるわけである。

さて、当初見られた問題分裂傾向が「先把握」の分析へと、つまり「理論的前提」の回避から「哲学的前提」の取得へと吸収されるかたちをとることになったわけであるが、こうなると次に問題となるのは「現象学的方法」であろう。それも特に「形式的告示」に関して当初携わっていた問題そのものが吸収された後も用いられているという点に留意しなければならない。

2. なぜハイデガーは「形式的告示」に固執したのか

ハイデガーが「形式的告示」に固執し続けた理由は、彼がある問題を当時解決出来なかったことにあると考えられる。それは「言葉についての対話」という論文の中で「言葉と存在についての省察が私の思索の道を早くから規定しているがために、それらについての論究はできるかぎり背後にとどまる」(GA12, 88)と語っているように、「存在」と「言葉」あるいは「記述」、「言語化」といった問題が解決されていなかったためである。これは、例えば一九一九年の講義「哲学の理念と世界観問題」(GA36/57)の最終部の直前で、彼が現象学的探求に対する反論について語っている箇所を見ても明らかである。ここでは充分な危険性をもつ反論として「言語に関して行われる反論」を挙げている。これは「一切の記述とはことばで捉えること」(GA36/57, 111)であり、「ことばによる表現は一般化を行う」(ibid.)のではないかというものである。彼は「体験」を非理論的に「現象学的直覚」によって捉えることができると考えていた。しかしいくら「自分が記述を行う以前にまずは見なくてはならない」と言っても、あるいは世界以前の「何か」を体験していても、それ自身は否定されえないのだが、その体験を「記述(言語化)」してしまっても「非理論的」なままであると言えるであろうか。はたして「非理論的記述」といったものが存立しえるだろうか。プレヒ

トによる書き取りでは「根本的な困難さ」として「記述、言語的形式化は理論的言及であらざるをえない」(GA. 56/57, 216)と記されている。そして彼は結局この問いに対して明確に答えられていないのである。よってこう言えるかもしれない。それは「形式的告示」という方法で「言葉」に関する問題から逃れよう、あるいは問題を先送りしようとしていたのではないかと。なるほど「形式的告示」とは便利なもので、何も決定したりはせずただ「空虚な可能性」だけを示すものであった。従って彼が「根本的な困難さ」と嘆いていた「言語的形式化」を一般的意味、すなわちある事象に関して概念規定を明確に行うことだとすれば、「形式的告示」はこの「困難さ」を一旦回避できるというわけである。

しかし「困難さ」は克服できたわけではない。「言葉」の問題は依然として目の上のたんこぶとして彼を苦しめることになる。「形式的告示」は少なくとも一九二九年から三〇年にかけて行われた講義「形而上学の根本諸概念」(GA.29/30)の頃までは彼にとつては有効な手段として機能していたことがハイデガー研究者の間では一般的に認められつつある。⁽²⁰⁾ 従って逆にハイデガーはこの頃まで「言語」について論じることができていないともとれるわけである。このことは「言葉についての対話」においてハイデガーが「教授資格論文から二〇年を経て、ようやく、ある講義の中で言語の問題を論じてみた」(GA.15.89)と語っていることとも合致する。ここで言われている講義とは一九三四年に行われた「言葉の本質への問いとしての論理学」(GA.38)を指している。しかしここでもまだ「言語」について論じることとはできず、「またさらにほとんど一〇年近くかかってしまった」(GA.15.89)と述べられており、相当この問題が先送りにされ続けたことが読みとれよう。⁽²¹⁾

「形式的告示」はこのように初期フラインブルク時代に始まってマールブルク時代、そして一九三〇年代前半までハイデガーの思索を牽引してきたのであり、それは同時に「言葉」に関する問題を回避するものでもあったのである。

まず「形式的告示」、「現象学的解体」、「先把握」と『存在と時間』とのつながりを簡単に見ておくことにしたい。

「形式的告示」に関してハイデガーは『存在と時間』の中ではほとんど言及していないのだが、近年の研究によって『存在と時間』が「形式的告示」という手法で書かれていたとする研究者も現れてきている。⁽²²⁾ 一方「現象学的解体」は書かれることのなかった第二部の表題、「テンポリテートの問題性を手引きとする存在論の歴史の現象学的解体の要綱」として示されており、またその後一九二七年の講義「現象学の根本問題」(G22a)のなかでは「現象学的還元 (Phänomenologische Reduktion)」、「現象学的構成 (Phänomenologische Konstruktion)」と並んで「現象学的方法の三つの根本的構成要素」の一つに数え入れられている。⁽²³⁾

また「先把握」に関しても、ハイデガーは『存在と時間』においてこれを主題の一つとして扱っていると考えてよいだろう。第一編第五章第三二節における「了解と解釈」の分析においては「先持」、「先視」とならんで「先把握」が議論されており、これらは第二編の冒頭で「解釈学的状況」と名づけられる (SZ233)。そして明確に読み取れるわけではないが、第二編第五章「時間性と歴史性」において「先把握」と「歴史」(「本来的歴史性」)との関連性も見取れる。⁽²⁴⁾

さて最後に本稿の主旨からは少々越え出てしまうことになるが、初期フラインブルク時代に限って見られ、その後は扱われなかった問題について若干見ておくことにしたい。まず「前提」に関してハイデガーは「論理学的前提」と「時間的前提」、そして「哲学的前提 (先把握)」とを区別していたのだが、その関連性が十分に議論されたわけではなかった。どちらかといえば彼は「前提」を分類しておきながら、最終的に議論が「先把握」一辺倒になってしま

った。従って「前提」の問題は再度取り組まねばならない問題であるといえよう。また挫折してしまった「生き生きとした生」の記述においても、そのまま引き継ぐわけにはいかないが、本稿では扱うことのできなかった全集第六一巻の最後に見られる「Ruinanz」論などは「言葉」や「言語」を考察する上では示唆に富む分析である。もし「Ruinanz」論の挫折が、この言葉に備わる伝達機能の欠如にあるとすれば、そもそもなぜそれを承知の上でハイデガーがわざわざこの奇妙な「Ruinanz」という言葉を用いなければならなかったのかを考察しなければならぬ。すなわちハイデガーは誤解の生じる恐れのある、手あかまみれの既存の言葉を用いるよりも、もしかすると一切伝えることができないかもしれないが、何の先入観も植えつけられていない言葉を用いたその真意を汲み取らなければならないのである。そしておそらくこのことを探究することが、言葉が持っている限界や「困難さ」を際立たせることに繋がり、やがて様々な言葉に関する問題を解決へと導いてくれるのではないだろうか。

註

- (1) 四日谷敬子『ハイデッガーの思惟と芸術』世界思想社、一九九六年、第一章「事実性と個性——初期ハイデッガーとアリストテレス——」参照。
- (2) 有馬善一「形式と存在——初期ハイデッガーの思惟における〈形式的なもの〉の意義について」(関西哲学会編『アルケー』関西哲学会年報No.12、京都大学学術出版会、二〇〇四年、所収)参照。
- (3) Vgl. Otto Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Verlag Günther Neske Pfullingen, 1963.
- (4) 初期フラインブルク期の講義録が全集として刊行されたのは一九八〇年代後半からのことであり、二〇〇五年九月、ついに全集第六二巻をもって初期フラインブルク期の講義録はすべて出そろった。
- (5) Vgl. Martin Heidegger, *Mein Weg in Phänomenologie*, in: *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1988, 48-53. William J. Richardson, *Heidegger Through phenomenology to Thought*, Fordham University Press, New York,

2003, p.VIII-XXII. Martin Heidegger, Aus einem Gespräch von der Sprache, in: Gesamtausgabe Bd.12, *Unterwegs zur Sprache*, hrg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1985.

- (9) Theodore Kisiel, Das Entstehen des Begriffsfeldes 'Faktizität' im Frühwerk Heideggers, in: *Dithey-Jahrbuch*, hrg. v. Fribhof Rodi, Bd.4, Göttingen, 1986-87, S.119. なお、初期フライブルク時代から『存在と時間』へと至るハイデガーの思索の歩みがいかに捉えられてきたかについては次のものを参照されたい。溝口宏平『超越と解釈——現代解釈学の可能性のために——』、晃洋書房、一九九二年、第三章「事実と解釈——「事実性の解釈学」の理念とその射程——」七六頁—七七頁。

- (7) 一九一九／二〇年に行われた講義 (GA.58) でもハイデガーは後半で「我々の方法はジグザグの線の中にあり、前へと飛び出したり、後ろへ跳び下がったりしているのである」と述べたり、「外見的にははかどっていないように見えるが、しかしそれでも一歩一歩根源領域に近づいている」、あるいは「この方法はしかしとてもゆっくりとしたものである」と語ってゐる。Vgl. GA.58, 229.

- (8) 例えはその試みの一つとして「目的論的-批判的方法」が取り上げられており、その代表者としてロツツェが引用され、批判されてゐる。Vgl. GA.56/57, 33-39.

- (9) Vgl. GA.59, 201.

- (10) 実際は「被解釈性 (Ausgelegtheit)」という語が用いられているのだが、意味としては「先把握」と同義である。Vgl. GA.62, 366-367.

- (11) 最終部はO・ベッカーによる講義の書き取りのノートが用いられている。

- (12) この場合の「解体」とは「現象学的解体」のことではなく、「客観化した生」を「生き生きとした生」へと連れ戻すことを意味している。

- (13) ここでは「先把握」と「言語使用」との関係が取り沙汰されており、「Philosophie」という言葉の語源である“φύσις φύσις”まで遡ってプラトンの使用例を挙げながら「先把握の固定」を行っている。こうした試みは、その後例えば「現象学」や「解釈学」といった学問の規定においてしばしば見られる傾向であり、たいへん興味深いといえよう。また「形式的告示」と「先把握」が交差している点も見逃してはならない。なお、「先把握」と「形式的告示」との関連性は、全く不

十分な私たちではあるが、「論評」においてすでに見られる。Vgl. GA.9, 9.

- (14) この「無前提性」とは明らかに「理論的前提」のことではなく「先把握」の意味で用いられている。当時はまだ術語が確定していないところがしばしば見受けられるが、これもその一つと思われる。

- (15) Vgl. GA.59, 180-181.

- (16) 一九六九年にマクス・ニーマイヤー社から刊行された論文集『思索の事柄へ』に収められている。しかしもともとはヘルマン・ニーマイヤー生誕八〇年記念集への寄稿として一九六三年に起草されたものである。

- (17) ハイデガーはこのことを「歴史的なもの」と呼び、「Historisches」という単語を用いている。

- (18) Vgl. GA.60, 34ff.

- (19) 「付論I」の成立時期については明確に決定できないと編集者は「あとがき」で述べているが、おそらく内容からして「講義」の後に書かれたものであると思われる。

- (20) 森一郎「ハイデガーにおける形式的暗示」(哲学会編『西洋哲学史考』、哲学雑誌第一〇五巻第七七七号、有斐閣、一九九〇年、所収)一七九頁の註の(5)及び古東哲明『ハイデガー「存在神秘の哲学」(講談社、二〇〇二年)七〇頁以下参照のこと。またベゲラーにおいては次の著書を参照された。Otto Pöggeler, *Heidegger in seiner Zeit*, Wilhelm Fink Verlag, München, 1999, S.28ff.

- (21) またこれらのことと関連して、ハイデガーがこの時期「論理学」についてその重要性を指摘しながらもわずかしか論じていないことにも注目すべきである。

- (22) 寺邑昭信「形式的告示について——初期ハイデガーの方法論」(鹿児島大学法学部編『鹿児島大学法学部紀要 人文学科論集』第四六号、一九九七年、所収)一七七頁及び有馬善一「形式と存在——初期ハイデガーの思惟における〈形式的なもの〉の意義について」(関西哲学会編『アルケー 関西哲学会年報 No.12』、京都大学学術出版会、二〇〇四年、所収)一九四頁の註(13)を参照のこと。またベゲラーは「形式的告示」(ベゲラーに従えば「形式告示的解釈学」)については、『存在と時間』の刊行されなかった第一部第三編で論じられることになっていく。Vgl. Otto Pöggeler, *Heidegger in seiner Zeit*, Wilhelm Fink Verlag, München, 1999, S.28.

- (23) Vgl. GA.24, 28ff.

(24) 「本来的歴史性」と「先把握」の関係については拙論『存在と時間』における「歴史性」の問題とその背景」(『大谷大学大学院研究紀要』第二〇号、二〇〇三年、所収) 参照。

文献表

ハイデガーからの引用は本文中及び註に次の略号とその頁数をそれぞれ括弧内に示した。

- GA.1: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.1, *Frühe Schriften*, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1978.
- GA.9: Martin Heidegger, Anmerkungen zu Karl Jaspers »Psychologie der Weltanschauungen«, in: Gesamtausgabe Bd.9, *Wegmarken*, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1976.
- GA.12: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.12, *Unterwegs zur Sprache*, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1985.
- GA.56/57: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.56/57, *Zur Bestimmung der Philosophie*, hrsg. v. Bernd Heimbüchel, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1999.
- GA.58: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.58, *Grundprobleme der Phänomenologie*, hrsg. v. Hans-Helmuth Gander, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1994.
- GA.59: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.59, *Phänomenologie der Anschauung und des Ausdrucks*, hrsg. v. Claudius Strube, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1993.
- GA.60: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.60, *Phänomenologie der religiösen Lebens*, hrsg. v. Matthias Jung und Thomas Regehly und Claudius Strube, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1995.
- GA.61: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.61, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles*, hrsg. v. Walter Bröcker und Käte Bröcker-Ortmann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1994.
- GA.62: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.62, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik, Anhang: Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles (Anzeige der hermeneutischen Situation)*, hrsg.

v. Gunther Neumann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2005.

GA.63: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd.63, *Ontologie(Hermeneutik der Faktizität)*, hrsg. v. Kate Bröcker-Ortmanns, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1995.

GA.64: Martin Heidegger, Gesamtausgabe Bd. 64, *Der Begriff der Zeit*, hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2004.

SD: Martin Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1988.

SZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1993.

邦訳に関しては次のものを参照した。

ハイデガー『初期論文集』（ハイデッガー全集第一巻）岡村信孝、丸山徳次、ハルトムート・ブフナー、エヴェリン・ラフナー訳、創文社、一九九六

ハイデガー「カール・ヤスパーズの『世界観の心理学』に寄せる論評」（ハイデッガー全集第九巻『道標』に所収）辻村公一、ハルトムート・ブフナー訳、一九九四

ハイデガー『言葉への途上』（ハイデッガー全集第二二巻）亀山健吉、ヘルムート・グロス訳、創文社、一九九六

ハイデガー『哲学の使命について』（ハイデッガー全集第五六／五七巻）北川東子、エルマー・ヴァインマイアー、エベリン・ラフナー訳、創文社、一九九三

ハイデガー『オントロギー（事実性の解釈学）』（ハイデッガー全集第六三巻）篠憲二、エルマー・ヴァインマイアー、エベリン・ラフナー訳、創文社、一九九七

ハイデガー「アリストテレスの現象学的解釈——解釈学的状況の提示——」（『思想』第八一三号）高田珠樹訳、岩波書店、一九九二

ハイデガー『言葉についての対話』高田珠樹訳、平凡社、二〇〇〇

ハイデガー『思索の事柄へ』辻村公一、ハルトムート・ブフナー訳、筑摩書房、一九七三

ハイデガー『存在と時間』（世界の名著）原祐訳、中央公論社、一九八〇

ハイデガー『存在と時間』(ちくま学芸文庫) 細谷貞雄訳、筑摩書房、一九九四

(本学任期制助手〔二〇〇六年三月原稿受理時点〕哲学)

〈キーワード〉前提、先把握、言葉